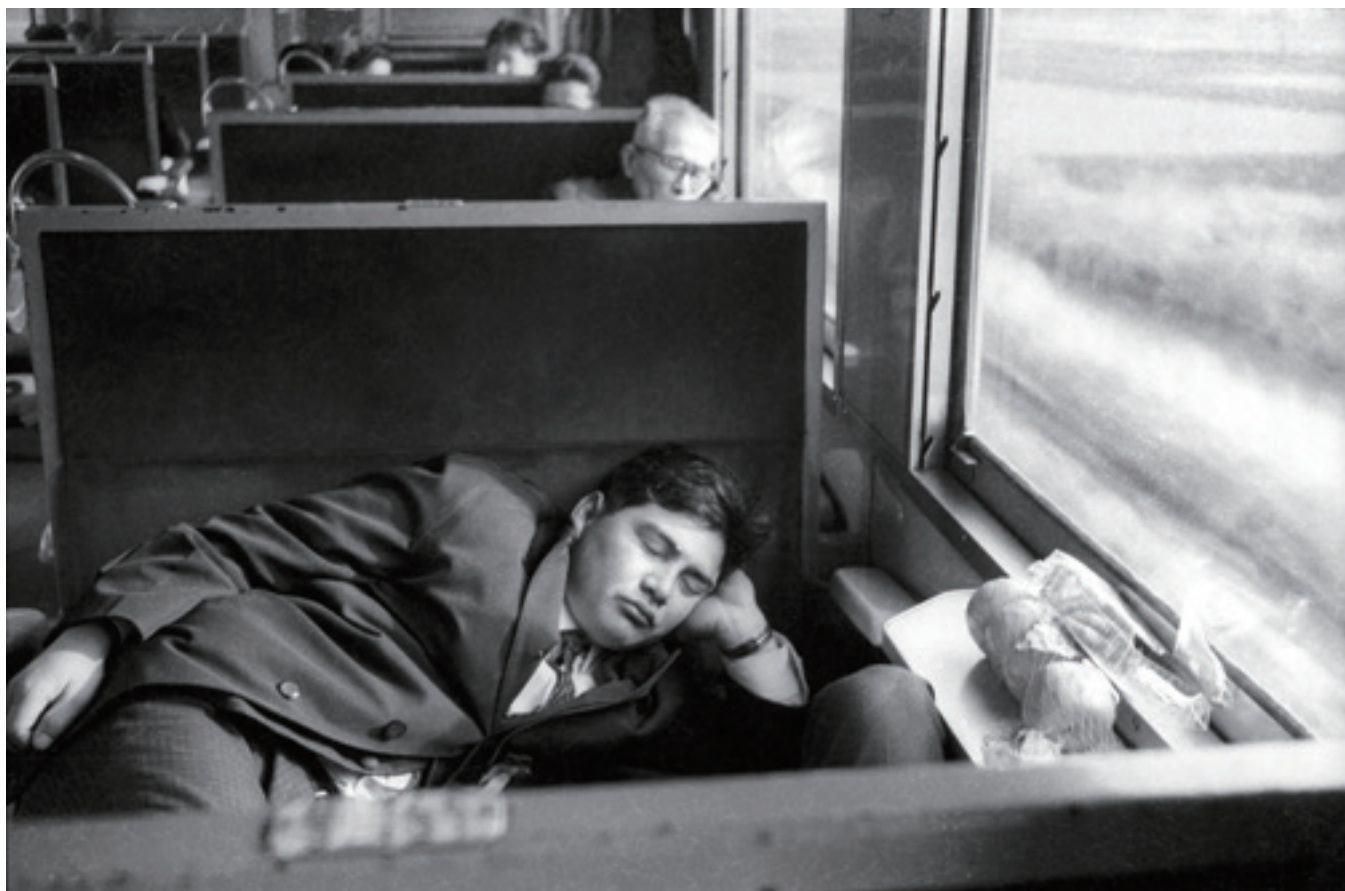


# 勝之助兄にゃと写真

船城俊太郎



(上) TK-P-005-046-06 1960年代

(下) TK-P-006-038-26 1960年代

角田勝之助さんのことを、金山町玉梨の人たちは通常「勝之助兄にゃ」「勝兄にゃ」と呼ぶが、その勝兄にゃは私にとって始めはラジオの人であって、カメラの人ではなかった。

戦後しばらく、玉梨では新しいラジオを手に入れることが難しく、戦前からのそれに修理・手入れをしながらラジオ放送を聞いていた。私の家には、そのような修理などを出来る人はおらず、勝兄にゃに頼んでいた。そして、戦前からの機械がいよいよ駄目になると、勝兄にゃは、ラジオのキットの販売をどこからか見付けて、それを組み立てて私の家に持ってきてくれた。そのようなラジオは、前後三台ぐらいあったように記憶する。

勝兄にゃの家とは、もともと親類だったので、ラジオの修理などの後で私の家に泊まってゆくこともあった。そして、私が小学二年生になる春休み（昭和二十七年）に、勝兄にゃは、私の両親の仲人で、隣の坪（＝集落のこと）のコマノ姉と祝言をあげた。それにより私の家と勝兄にゃの家は、益々親密になったと思われる。

そんな間柄の親類であるにもかかわらず、私は、勝兄にゃがこんなに深い写真の趣味を持っていることを、かなり最近まで知らなかった。私の家の葬式や法事の集合写真を撮って貰ったことは何度もあるが、単なる素人の写真以上のものではないと思っていた。しかし、十数年前に勝兄にゃの写真歴が戦後すぐにまで遡り、撮ったその枚数が膨大であることを、たまたま知って驚いた。

その頃、私は、過疎が進行する故郷の村々の文化財や歴史資料が、今後どのようにになってしまうのか心配になり、それらをどうすればよいのか、少し考え始めていたが、特に写真の類は散逸しやすいと思われ、早急に手を打つ必要があると思うようになった。そんなところに、当時私が勤めていた新潟大学人文学部に、アーカイブ（保存記録）が専門の原田健一さんが赴任された。そこで、勝兄にゃの写真のことを相談してみたところ、早速に金山町玉梨まで来てくださり、事が始まったのである。

当初、勝兄にゃの写真中に見いだせると私が考えたのは、過去に福島県立博物館などがそれを利用した例からして、民俗学関係のものかということであった。ところが、驚いたことは、原田さんがそればかりではなく、芸術的なものもそこに見いだしたと思われることである。そして、それにより勝兄にゃ

の写真が「村の肖像・展」として世に紹介され始めたのであるが、そのことは、私にとって晴天の霹靂に近く、勝兄にゃという人をもう一度見直してみなければ、という気持ちにさせた。

その一方で、私はそこで展示される写真の中に、私の両親のそれが、なかなか見出されないことに気がついた。勝兄にゃの仲人親であり、親しくしていたはずの両親の写真が見つからないのは、不思議なことに思われた。

しかし、また考えるに、私の両親は、そのような間柄からして、勝兄にゃにとって少し煙たい存在だったのではないだろうか。戦後すぐの時代では、多分玉梨でたった一人の写真機の所有者であり、それを趣味としていることも、微妙に影響しているかとも思われる。

そして、そのような目で見ると、被写体となった人達には、村の長老や玉梨小学校の先生方などのような気の遣える人は少なく、勝兄にゃと同年ぐらいか、それ以下の年齢の人が多くのように思われる。玉梨・八町のそのような人達中心に、自由自在に撮影して来たのが、勝兄にゃの写真と言えるのではないだろうか。

そのような作品には、一見スナップ写真のように見えるが、実は軽くポーズを取っているものも多いように思われ、被写体自体も写真造りに参加して、その満足感を共有しているように見えるものも多い。その

辺りが芸術性が感じられる理由ではないであろうか。

勝兄にゃの写真には、よくある、民俗学や歴史学的な価値を意識したような作品が少ないことも、その特長の一つかと思われる。それがよいことかどうかは、議論の余地があるかも知れない。しかし、そのことは、あくまで人間の姿そのものに興味があるということかと思われ、写真が固い印象を与えるものになることも防いでいるように思われる。

勝兄にゃは、昭和三十年代以降、地元の建設会社の現場写真の係となり、定年を迎えた。

したがって、玉梨以外に住んだことはないと思われる。一人息子という立場で成長し、戦前、戦中、戦後を生きてきた勝兄にゃが、オーディオ関係やカメラのほか、カラオケも大好きであることはよく知られている。大工仕事の趣味も持ち、勿論お酒も大好きで、その周囲はいつも賑やかである。都会風もなく、田舎風とも言えず、趣味とともに戦後の山村に人生を送ってきた、稀なる人だと思われる。 ■



角田勝之助の父弥一 TK-P-001-004-04 1950年代